第一 セッション 宗教と社会: 近世後期の仏教と自他認識の転回

オリオン・クラウタウ

一、はじめに

オーソドックスな思想史研究の立場から、近世仏教の思想的・思想的な役割をめぐる研究は大きく展開した。高埜利的・思想的な役割をめぐる研究は大きく展開した。高埜利的・思想的な役割をめぐる研究は大きく展開した。高埜利的・思想的な役割をめぐる研究は大きく展開した。高埜利的・思想的な役割をめぐる研究は大きく展開した。高埜利的・思想的な役割をめぐる研究は大きく展開した。高埜利的・思想的な役割をめぐる研究は大きく展開した。高埜利的・思想的な役割をめぐる研究は大きく展開した。高埜利的・思想的な役割をめぐる研究は大きく展開した。高埜利的・思想的な役割をめぐる研究は大きく展開した。高埜利的・思想的な役割を対している。

二〇〇一年) や、小川原正道による明治初期の宗教行政を 術 文閣出版、二〇〇八年)など、 殉教の明治』岡田正彦訳、ペりかん社、二〇〇六年 ジェームス・ケテラーの廃仏毀釈研究の日本語訳(『邪教 めぐる成果(『大教院の研究』慶應義塾大学出版会、二〇〇三年)、 動とナショナリズムの研究(『近代日本の日蓮主義運動』 界の再考を促した西村玲の業績も、 「隆盛期」を迎えた。例えば、大谷栄一による在家仏教運 そして二一世紀において、近代日本仏教の分野も、 上の諸分野を止揚させた研究である。 谷川穣の教育史研究 (『明治前期の教育・教化・仏教』思 いずれも独自の視点から、 注目に値する。 [原著一九九〇 法蔵館

うひとつの大きな動向として、近代日本の宗教概念をめぐ プロセスにまつわる我々の理解を大きく深化させた。 の宗教概念』(有志舎、二〇一二年)という成果が、 とその系譜』 京大学出版会、一九九九年)、 着していったことは以前から学界の一 にみられる religion という言葉の訳語として、 る業績も挙げなければならない。「宗教」 (岩波書店、 例えば、 二〇〇三年)、 山口輝臣 磯前順一 『近代日本の宗教 明治国家と宗 星野靖 部にとって周 は欧州 二『近代日本 明治期に定 の諸 その定着 知 言説 のこ 東

異なる形式で示した二人の僧侶 他認識が如何に転 八〇〇一一八八八) 月性(一八一七―一八五八)および同宗東派の学僧 極めて重要なキーワードとなった「護法」をそれまでとは 性について検討してみたい。具体的には、 ない。そこで本稿では、 果との関係において捉えるような研究は現時点でいまだ少 果を総合的・連続的に、 において語られることに留まっており、これらの時 はそれぞれ大きく展開したが、 .おける宗教言説の形成過程をめぐる数多くの研究成果に 以上、二一世紀になってから近世および近代の仏教研究 回したのかを明らかにすることで、 を通して、 近世および近代の仏教思想の連続 かつ近年の宗教概念論をめぐる成 おの 「仏法」を担う人々の自 おのの時代区分の枠組 真宗西 幕末期 派 0 海 E 龍温 おい 代の成 防 日本 7

貢献することを目指すものである。

月性 0 場 合

年に、 大洲鉄然 (一八三一—一九〇二) など、 崎に戻り、 は篠崎小竹(一七八一―一八五一) 経験は彼の海防思想を大きく展開させたといわれる。 時代に初めて、長崎でオランダ船を目の当たりにし、 八五—一八四六) 籍を学ぶ。一八三六年に肥前に移り、善定寺の不及 八〇三―一八六三)が営んだ豊前の蔵春園に入り、 なる高島秋帆 (一七九八―一八六六) の直弟子・恒遠醒窓 世界で活躍している。 で共有されたキーワードとなっていく一八二〇年代 の梅田雲浜 の咸宜園 (現・山口県柳井市)に生まれ、広瀬淡窓(一七八二—一八五六) 八五九) さらに、広島では坂井虎山 最 初に取 後に「火技之中興洋兵之開基」とも呼ばれることと との生涯にわたる交流が始まっ (現・大分県日田市) 生家の妙円寺の境内で、 り上げる月性は、 (一八一五―一八五九) や頼三樹三郎 の下で教学の理解を深める。この肥前遊学 一八一七年に周防国大島郡 などで漢学を学び、一八三一 「海防」 (一七九八—一八五〇)、 の梅花社でも学び、 私塾· が 日本の た。 時習館を開 その後は遠 知 (一八二五 識 国の 大坂で 遠 以 人 その 崎村 0 血 \mathcal{O} 間

明治初期における西

時期のことである。 田松陰(一八三〇―一八五九)との親交を深めたのも、この本願寺の中心人物を教育する。幕末志士として知られる吉

一八五三年の「黒船来航」を契機として、月性は『内海 ・ 長州藩はその責任を全うすべきであると主張し、一種 ・ 長州藩はその責任を全うすべきであると主張し、一種 ・ 大砲を鋳て奢侈をとどむ/五、火薬を製して軍用に がった。この建白の数箇月後、彼は、『藩政改革意 にす」である。この建白の数箇月後、彼は、『藩政改革意 にす」である。この建白の数箇月後、彼は、『藩政改革意 見封事』を著し、幕府が海外からの脅迫に対抗できない場 ・ 長州藩はその責任を全うすべきであると主張し、一種 ・ 一八五三年の「黒船来航」を契機として、月性は『内海

②西洋諸国は、まず人々をキリスト教に誘引しその後、軍の計幕論も唱えていたことがわかる。

②西洋諸国は、まず人々をキリスト教に誘引しその後、軍リスト教に本願寺(浄土真宗)が積極的に対抗すべきこと。一八五六年に、月性は西派の教学界で著名な僧・超然の討幕論も唱えていたことがわかる。

をすべきこと――である。 していた「仏法」を精神的なバックボーンとして民衆動員していた「仏法」を精神的なバックボーンとして民衆動員きこと。④一種の皆兵論、端的に言えば浄土真宗を中心と略を試みる西洋諸国に対し、「教」を以て「教」を防ぐべ略を試みる西洋諸国に対し、「教」を以て「戦」で日本侵事力によって他国を侵略する点を理解すべきこと。③仏法

居成した。 岩成した。 岩成した。 岩成した。 岩成した。 岩成した。 其は一八五八年に急死するが、西本願寺は意見書を編集し、特に教団改革に関するような部分を削除した上で集し、法と回論』として上梓し、広く配布した。特に長州において、月性の仏法による「護国論」の影響は大きく、吉田松陰に加え、奇兵隊を創設した高杉晋作(一八三九一一八六七)も子は、古代、 古代と農民を率いて諸隊――例えば「護国団」など――を 信侶と農民を率いて諸隊――例えば「護国団」など――を 結成した。

つの自他認識の転回の事例を取り上げたい。
まうとしたが、次に同じ近世後期の僧侶におけるもうひときる。月性は仏者を「海防」に尽力すべき存在に変貌させきる。月性は仏者を「海防」に尽力すべき存在に変貌させ影響は宗派内外を問わず、広範なものであることが確認でいが、ポストボナパルト的な兵学思想に感化された彼の以上、月性の執筆活動自体は決して長く続いたわけでは以上、月性の執筆活動自体は決して長く続いたわけでは

年に、 に任ぜられた。 0 や天文学まで、 師事した。 賀野市下条町)に入って香樹院徳龍(一七七二―一八五八)に 想に直面する。 出 西 香 光寺 圓光寺の住職となり、一八四九年に、 華厳に加えて唯識、 「て児島宗悦 111 東派学寮の最高責任者たる (現 越後において宗乗・余乗を修めた後、 温 福島県喜多方市) 一八六一年は「嗣講」に昇格し、 十九歳には越後国の無為信寺 幅広い知識を修めている。三九歳 (生没不詳) に儒学を学び、 Ï 天台、 は、 に生 俱舎、 八〇 「講師」となった。 生まれる。 Ŏ 因明、そして国学 年に、 学寮の 初めて排仏思 十四歳 (現・新潟県阿 代 京都に赴 「擬講_ の時に京 一八六五 で若松 国

仏 び にキリスト教研究を命 蘇教徒」 目の当たりにしても無関心な仏者に対して警鐘を鳴ら らに一八六二年には 教の 『急策文』を発表し、とくに後者では、 薩英戦争も起きたこの年に、 八五八年に、 からの批判に応える必要性を講じている。そして 兀 方 7ノ敵」 東派前法主の達如(一七八〇―一八六五 である「儒者輩・神学者 「耶蘇防禦掛」を任されている。 ぜられた龍 彼は 温は排耶書を著し、 闢邪 開港後の 護法 ・天文者・耶 論 、時勢を およ ×

> り、 から、 めてい という書物の基礎となる講 籍 リスト教の る。この時期の僧侶の中では、 播力を有するとされたキリスト教に特別な注意を払 おいて「排仏家」と認識された論者全体に対する総合的な 天文や地理をめぐる最新知識の獲得も必要なものとして勧 宗学以外に関心を寄せない僧侶についてもまた批判的 っている。 のキリスト教書を踏まえての理解であろう。 それは恐らくプロテスタント系の宣教師自身による漢 る。 龍温はそれまでの研究の成果として『総斥排仏弁』 なお龍 本書は、 旧 世界観の中心要素たる須弥山を弁護するため、 教」と「新教」 温 儒学者や国学者など、 は、 四方ノ敵」 義を京都、 の相 龍温は 違につい 大坂、 の中でも、 かなり早い段階でキ 幕末期 て指摘 江戸などで行 一八六五年 の当時に 強烈な伝 ってい してお いであ

課題を ころで龍温が強調するのは、 資するものとして本書を著した。『総斥排仏弁』の 法」であるとした浄土真宗を信じる者こそ、 仏教徒、 自覚して、排仏家に対抗する必要があると主張し、 龍温は、 」に反論することである。 構成す そしてその中で末法の時代に最も 大乗が栄えるのに最も相応し Ź 外学 0) 知識を広く深く修めて、 史書や洋学など、 龍温は一八六〇年代を通し (V 地 場所と時代を 相 であ 仏教以外の 応 る日 それに 至ると 四方 本の 護法の書物である

任者の一人を任されたことは、全く驚くことではない。ことにした。そして他でもなく龍温が、この機関の最高責科を提供する「護法場」なる機関を、学寮の枠外に設ける認め、明治元年に「国学」「儒学」「天学」「洋教」の四学て外学教育の必要性を訴え続け、本山もやがてその意義を

手になる漢訳書を読破しており、 それなりの研究蓄積があり、 ということは、近代日本における宗教言説の定着を理解す 徒は特に、着目に値しよう。 ム教と並ぶものとしての仏法を構想した龍温のような仏教 を取り上げるものが少なく、検討すべき余地は多々ある。 チされているものの、幕末期に関しては、 スト教、法体系の形成、といった様々な側面からアプロ る上で、重要なポイントとなる。宗教言説史をめぐっては 知識の枠組において如何に「仏法」を捉えなおしたのか、 情を意欲的に学習しようとした龍温のような僧侶が、 伝統教育を受けながらも幕末のコンテキストで海外の事 一八五〇年代後半からすでに、 外交や翻訳、大学制度、 キリスト教およびイスラ 欧米の宣教師などの 外交以外の問題 その キリ

四、おわりに

桐原健真は、吉田松陰の検討を踏まえ、この時期におけ

のように述べている。 る日本列島の知識人の「自他認識の転回」をめぐって、次

れを認識する主体の意識の変質こそがある。 そこには対象としての「夷狄」の変化ではなく、むしろそ体的な「他者 der Andere」として認識されるに至るとき、としか認識されなかったものが、みずからに対峙する具とれまでたんに「夷狄」あるいは「異人 der Fremde」

月性や龍温における思想的変容からは、政治思想のみな りず、仏教においてもその自他認識の転回の道が歩まれて で、それぞれの「護法」の立場を二人の僧侶が以上のよう で、それぞれの「護法」の立場を二人の僧侶が以上のよう で、それぞれの「護法」の立場を二人の僧侶が以上のよう で、それぞれの「護法」の立場を二人の僧侶が以上のよう をけながらも幕末のコンテキストで海外の事情を意欲的に で、それぞれの「護法」の立場を二人の僧侶が以上のよう とがわかる。すなわち、全く異なる視点からではあ がたことがわかる。 で、それまでの伝統的な教育を に示したのである。 両者とも、それまでの伝統的な教育を に示したのである。 で、それまでの伝統的な教育を で、それぞれの「護法」の立場を二人の僧侶が以上のよう とず、仏教においてもその自他認識の転回の道が歩まれて らず、仏教においてもその自他認識の料面において「仏法」

こともまた事実である。すなわち、月性の本来の意図は異れが「護国論」という題目の下で、広範囲に流布していた明に置いたものである、という理解も可能であろうが、そ頭に置いたものである、という理解も可能であろうが、それが「護国」に尽力するような仏者像を提供した。無論、わず、「護国」に尽力するような仏者像を提供した。無論、

という宗教理解は龍温に始まったわけでないが、その護法 法護国 うとした思考には大きな思想史的意義があろう。 時最新の世界宗教に関する知識の枠組で仏教を位置づけよ 活動にみられるようなキリスト教への学究的な態度や、 列島において、「キリシタン」に並ぶものとしての「仏法 言説における自宗の位置づけへの道を開いた。 否めない。 なるものであった可能性もあるにせよ、その遺作たる『仏 論 の語りが、 他方、 で展開された海防論のコンテキストにおける 龍温のような仏教徒は 新たな国民像の形成に貢献したことも 「世界宗教」 無論、 なる 日本

ベ

13 していきたい。 仏教の「近世から近代へ」という展開を、さらに明らかに 蓄積がすでにみられる排耶論研究を、 月性および龍温とその周辺の護法僧を中心に、 おいてより 以上は当然ながら、一 密接に捉え直すことで、 種の 研究序説」に過ぎず、 日本思想史に 宗教言説論との関係 ある程度の における 今後

- 2 七九年、二 の先覚 村上磐太郎「月性と秋良敦之助」 四一頁 月性の研究』 月性顕彰会〈マツ (三坂圭治監修 ノ書店〉、 九 維
- 3 上記数点を表現するものの一 下記のように述べてい 部として、 月性自身 は 例

モノ、 ヲモテ近年来、 軍ナリ、 海防ノ急務ハ、教ヲ以テ教ヲ防グニシクハナキナリ。 相親ミ、 不肖切ニ恐クハ、今ノ勢遂ニマサニ沿海ノ愚民、 互市ヲ開キ、 二出ルコトヲ得ズ、姑ク彼ノコフ所ニ従ヒ、 下ノ勢ヤムコトヲ得ザル者アリ。 テ夷秋ヲ防グベキモノ、幕府以下、 陣ヲ習ヒ、 〔夷荻は〕 カラザルナリ。而シテ戦ヲ以テ防グハ、其責ニ任ズル バ、我ノ彼ヲ防グモ、 此ソノ責ニ任ズルモノソノ職ヲ尽スナリ。 世其人ニ乏シカラズ。 情好日ニ密ニシテ、 変ジテ犬羊ノ奴トナラントスルヲ。 列国諸侯ナリ、幕府及諸藩ノ士大夫ナリ。 既二人ノ国ヲ取ニ、 ソノ他槍剣刺激ノ技ニ至ルマデ、凡武備 土地ヲ仮シテ、 砲台ヲ築キ、 亦教ト戦トヲ以テセズン 披ノ厚利ヲ啗ヒ、 其吏ヲ置コトヲ聴サントス 其人トハタゾ。 軍艦ヲ造リ、 教ト戦 幕府遽二決戦掃蕩 講習綜練セザルハナ トノニヲ以 大砲ヲ鋳、 Ę 通信ヲ許シ、 / 故ニ今日 彼ノ邪教 然ドモ天 夷秋ト 征 コ、 ハアル アス ブル 而 銃

1 月性の伝記的情報をめぐっては、 間 .到る処青山有り』(ミネルヴァ書房、 例えば、 海 二〇〇五 原徹 月

を参照のこと。

性

仏法護国論』

一八五六年、

安丸良夫・宮地正

ソノ責ニ任ズルモノハタゾ。

旦

八宗

ノ僧

侶ナリ。

『宗教と国家』岩波書店、一九八八年、二一八―二一九

に出版されたものと推察される。い。しかし、吉田松陰関係の史料などから、一八五九年頃か。しかし、吉田松陰関係の史料などから、一八五九年頃た年代で、『仏法護国論』自体に、出版年は記されていなお、一八五六年は「護法意見封事」が広如に提出され

- 教、コレハ本邦ノ国禁従来御厳重ナル事ニテ、先第一ニ長7)「サテ次ニハカノ入港ノ外夷挙テ奉ズルトコロノ耶蘇集 第八巻・護法篇』春陽堂、一九三五年、三二頁)。

崎表ニ於テ耶蘇十字架刑ノ絵ヲ銅板ニ刻シテ、

年々一人モ

コサズコレヲ踏シム。

コレヲ絵踏トイフ。コレ日本ノ強

ナリ。 惜此事モピニ廃セラル。 モヒモナシ」(同右、三三一三四頁)。 ゼズ……。箇様ナル甚シキ事モ知ラズ、学バザレバ鷲クオ 教ノスグレタルコト、又古ノ天主教ト別ナルコトヲ未ダ弁 像ヲ拝スルユヘニ、コレヲ偶像教ト名ク。日本人コノ耶蘇 盛エヒロマル。コレ諸教ノ中ニヲイテ、最スグレ最正シキ 蘇ノ正義ニシテ、倫常徳行ノ道ヲ教ルコト儒教ヨリモ切ロ 禁ジタマヒシモ道理ナリ。此度ノ耶蘇教ハ不爾、コレハ耶 ジク天主耶蘇ヲ奉ズトイヘドモ、カレハ教ヲ弘ルモノ、私 テカレラ申立ルハ、古へ日本ニテ禁ジタマフ天主教ハ、 レ俄ニイフニハアラズ。ヤハリカノ方ニ在テ二派アリ。 国タルーノ名誉ニテ、海国図誌ニ諸書ヲ引テ歎美セリ。 ヨク栄エテ乞食貧人モナシ。仏教ノ如キハ益モナキ絵像木 ユヘニ人ミナ崇信ス。西洋ハコノ教ニヨリテ国家ヨク治リ、 モアリ、 ヲ加フル所ニテ、耶蘇ノ正意ニアラズ。仍テ妖術怪異 ハ別ナリトイフ。 ノ耶蘇教ハ、古へ日本ニワタリテ切支丹ト号セシ天主教ト 死後究竟ノ賞罰、地獄天堂ヲ教ルコト仏教ヨリモ明カ 故ニ西洋ヨリ亜弗利加、 他国ヲ侵略スル意謀モナキニアラズ、故ニカレハ コレハタ、日本ノ国禁ヲ避シ為ニ、 猶又恐ルベキコトアリ。 今ハ満清ノ内地ニ至ルマデ 此度渡来 可

―一二頁)。 ―一二三頁)。 桐原健真『吉田松陰の思想と行動――幕末日本におけ

付記 および岩田氏の両代表者に感謝の意を表したい。 幕末思想史をめぐっていつも親切に指導して下さる桐原氏 教授・岩田真美代表)の成果の一部を紹介したものである。 題番号 16K02190、二〇一六年 び基盤研究CC「近代移行期における日本仏教と教化」(課 期護法論の思想史的研究」(課題番号 24520078、二〇一二 -110一四年、 本報告は科学研究費助成事業の基盤研究(C) 金城学院大学教授・桐原健真代表)およ —二〇一八年、龍谷大学准 「幕末維新

(東北大学准教授